

マグロ漁業に関する研究座談会

主催 三崎遠洋漁業研究会
水産海洋研究会
共催 神奈川県鯉鮪漁業協同組合
神奈川県鯉鮪漁業者協会
神奈川県水産試験場

日 時： 昭和 53 年 3 月 8 日 (水) 13:00~17:00
会 場： 三浦市三崎町城ヶ島 (生) 三崎海洋センター
コンピナー： 花 本 栄 二 (神奈川県水産試験場)

話題および話題提供者

1. カツオ・マグロ類の漁獲量変動—さて、三崎はどうする— 花本 栄二 (神奈川県水産試験場)
2. マグロ延縄漁業における釣獲率の変化 山口裕一郎 (三重大学水産学部)
3. 魚の能力を考える 石橋 正 (三崎水産高等学校)
4. マグロ資源国際管理の動向 上柳 昭治 (遠洋水産研究所)
5. 200 マイル漁業水域とマグロ漁業
一関係沿岸国との漁業協議の経緯等について— 志村正二郎 (日本鯉鮪漁業協同組合連合会)

1. カツオ・マグロ類の漁獲量変動—さて、三崎はどうする—

花 本 栄 二 (神奈川県水産試験場)

1. はじめに

現在の世界における人口増加率 (約 2%) が今後も続くならば、21 世紀初頭には、世界の人口は約 70 億に達し、そして、現在のような食生活の形態が続くならば、現在の食糧の 75% を増産しなければならない、といわれている。したがって、21 世紀初頭には大量の食糧不足が予想され、そのため、世界食糧会議では『食糧生産の増強』の決議がなされ、また、FAO は動物性蛋白資源の開発対象として、具体性かつ現実性のある未利用水産資源に着目し、その開発調査、研究を進めている (奈須、1978)。

一方、土地が狭く、畜産類の増産があまり期待出来ない海洋日本にとって、動物性蛋白資源の供給源として、魚への依存度が高く、魚は食糧資源の一翼として重要かつ不可欠なものとなっている。例えば、日本人、1 日 1 人当りの全蛋白摂取量は 80 g であるが、うち、動物性

食品は 39 g、さらに、このうち、魚は約半分の 19 g を占め、また、魚の消費量は世界第 1 位で、1 日 1 人当り 94 g (アメリカは 20 g) を摂取している。一方、肉の消費量は魚の半分以下で、1 日 1 人当り 40 g にすぎない (世界第 1 位はアメリカの 300 g)。このように、日本人にとって、魚は動物性蛋白資源の供給源として重要な存在となっている。

このように、水産資源は内外にわたり、動物性蛋白資源の重要な供給源として期待がもたれている。

日本の漁業生産量は年間、約 1,000 万トン、金額にすると約 1.9 兆円に達する (昭和 50 年)。このうち、魚種別の年間漁獲量は第 1 位がタラ類の 277 万トン、続いて、サバ類 (132 万トン)、イワシ類 (86 万トン)、イカ類 (53 万トン) の順であり、マグロ類は 31 万トンで第 6 位に位置するが、カツオ、カジキ類を含めると、近年では 70~80 万トンに達し (第 1 図)、全生産量の 1 割弱を占めて

いる。一方、生産額では、マグロ類は第1位で約2,000億円、2位はイカ類、約1,900億円、3位はブリ類、1,200億円と続くが、カツオ、カジキ類も含めると、3,100億円に達し(第2図)、全体の16.2%を占めることになる。

このように、日本の漁業の中において、カツオ、マグロ漁業は生産額では3,100億円で第1位、漁獲量でも70~80万トンで第4位を占め、量的にも、金額的にも重要な産業となっている。そこで、重要な産業であるカツオ・マグロ類の漁獲量変動が近年、世界的にも、日本のにもどのような状況にあるのか、主として1966年~1975年間にわたり、漁業養殖業生産統計年報を中心に調べた。

2. 世界のカツオ・マグロ類の漁獲量変動

世界のカツオ・マグロ類の漁獲量は1966年の約150万トンより、年を経るに従い徐々に増加し、1974年には約210万トンに達し、1966年に比べ1.4倍の増加となっている。魚種別にみると、ミナミマグロ(クロマグロを含む、以下同じ)、ビンナガは横ばいであるが、キハダ、メバチ、カツオは増加している。1974年の漁獲量はキハダが39万トン、メバチが16万トン、カツオが63万トンで、1966年と比べると、それぞれ、1.4倍、1.5倍、1.8倍の増加となっている。このうち、キハダ、カツオの増加は旋網漁業の発達(カツオは竿釣り漁業にもよる)によるものと考えられ、メバチの増加は日本人の高級魚指向のため、延縄の漁獲努力がメバチに向けられたことによるものと考えられる。

3. 日本のカツオ・マグロ類の漁獲量変動

日本のカツオ・マグロ類の漁獲量は1966年には80万トンあったが、以後、漸次減少し、1971年には60万トンの極小を呈した。しかし、1972年以降は世界の傾向と同じく増加し、1974年には81万トン記録した。この増加は竿釣りによるカツオの増加によるものである。しかし、1975年には68万トンに減少した(第1図)。これは、生き餌の不足、航海途中の餌の死、餌つき不良等によるカツオの漁獲減少によるものである。魚種別では、ミナミマグロは横ばいで4万トン(1974)、メバチは一時減少したが、近年は増加し、11万トン、キハダは世界では増えているのに対し逆に減少し、9万トン、カツオは世界同様増加し、37万トンの漁獲がみられた。

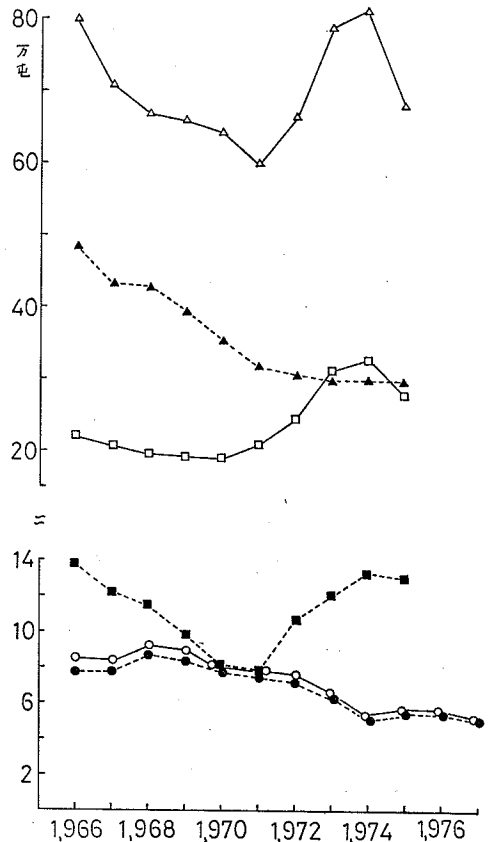
4. 日本のカツオ・マグロ類の漁業種類別漁獲量および生産金額

カツオ・マグロ類を漁獲する主な漁業種類は延縄、竿釣り、旋網である。1971年には延縄で28万トン(52%)、竿釣りで22万トン(41%)、その他、3万トン(6%)の

漁獲がみられ、延縄による漁獲が多かったが、1975年には延縄、26万トン(42%)、竿釣り、31万トン(50%)、その他、5万トン(8%)と、1971年とは逆に延縄より竿釣りによる漁獲の方が多くなっている。しかし、金額面では、1975年には延縄の1,950億円(62%)に対し、竿釣りは半分以下の900億円(29%)にすぎず、依然として延縄による生産金額の方が一段と高い。このように、漁獲量では竿釣りが主体となってきたが、生産金額としては延縄が主体である。なお、1975年の旋網による漁獲量は2.1万トン(3%)、金額は113億円(4%)で、日本のカツオ・マグロ漁業の中においてはまだまだ少ない。

5. 日本のマグロ延縄漁業による漁獲量

日本のマグロ延縄漁業による年間漁獲量は1962年に最



第1図 年別のカツオ・マグロ・カジキ類漁獲量(万トン)

△—△ 全国、▲.....▲ マグロ延縄漁業、
□—□ 静岡県内、■.....■ 静岡県内の水揚量からカツオ、ビンナガを除いた量、
○—○ 三崎港、●—● 三崎港の水揚量からカツオ、ビンナガを除いた量

高の 53.6 万トンに達した後、1971 年の 31.7 万トンまで減少し続け、以後、30 万トンを前後している(第 1 図)。魚種別にみると、ミナミマグロは横ばい、メバチは増加、キハダ、ビンナガは減少傾向にある(1975 年の漁獲量はミナミマグロ 3.4 万トン、メバチ 10.7 万トン、キハダ 5.5 万トン、ビンナガ 1.3 万トンである)。すなわち、日本のマグロ延縄漁業は世界の傾向と異なり、缶詰用のキハダ、ビンナガを漁獲しないで、ミナミマグロ、メバチ等の高級刺身用鮪を漁獲している。

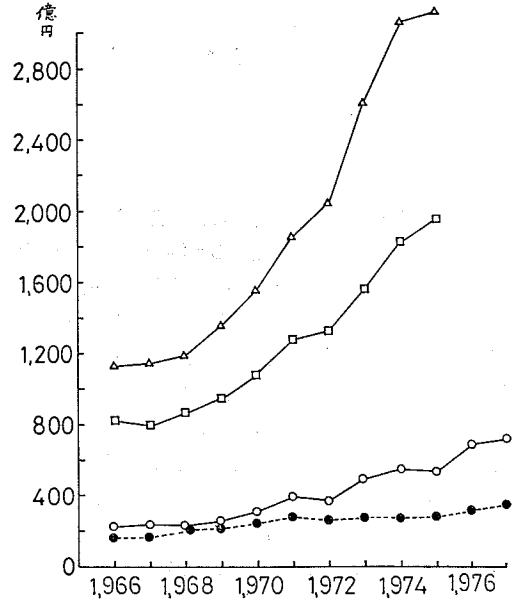
6. 静岡県内各港および神奈川県三崎港におけるカツオ・マグロ類水揚量の変動(第 1 図)

静岡県内各港(以下、静岡県内)におけるカツオ・マグロ類の水揚量は 1966 年の 22 万トンから 1970 年の 19 万トンまで漸次減少したが、1971 年以降増加し、1974 年には 32.5 万トンに達している。一方、三崎港では、1966 年には 8.5 万トンの水揚がみられたが、以後減少し、近年は 5 万トン強にすぎない。上述した静岡県内の水揚量は竿釣りによるカツオ、ビンナガを含んだものである。そのため、これらを除いた量を延縄による水揚量と考えると、静岡県内の延縄による水揚量は 1966 年の 14 万トンから 1971 年の 8 万トンまで減少したが、1972 年以降増加し、1975 年には 13 万トンに達し、1966 年の水揚量に近づいている。一方、同じく、カツオ、ビンナガを除いた三崎港の延縄による水揚量も 1966 年の 8 万トンから年と共に漸減し、1971 年には静岡県内とほぼ同じ 8 万トン弱となっている。しかし、1972 年以降、静岡県内では増加したのに対し、三崎港ではなおも漸減し、1977 年には 5 万トンの水揚に終わっている。

前述したとおり、1971 年以降の日本のマグロ延縄漁業による漁獲量は 30 万トン前後とほぼ一定しているので、1972 年以降の静岡県内の水揚量の増加、そして、三崎港の水揚量の減少は、三崎港水揚分の相当量が静岡県内で水揚げされたものと思われる。

7. 焼津港、三崎港の水揚金額(第 2 図)

1966 年の焼津港の水揚金額は 200 億円強であったが、以後徐々に増加している。特に、1973 年以降は竿釣りによる水揚金額も加わり一層増加し、1977 年には約 730 億円に達している。一方、三崎港の水揚金額は 1966 年には 200 億円弱で焼津港とあまり差がなかったが、以後焼津港が大幅に増加したのに対し、三崎港は微増にとどまり、1977 年には 360 億円にすぎず、焼津港との間に大き



第 2 図 カツオ・マグロ・カジキ類の年別水揚金額 (億円)

△—△ 全国, □—□ マグロ延縄漁業
○—○ 焼津港, ●……● 三崎港

な差、すなわち、約 370 億円の差がみられている。なお、1977 年の焼津港のビンナガ、カツオを除いたマグロ類の水揚金額はミナミマグロ、223 億円、メバチ、58 億円、キハダ、44 億円、その他のマグロ類 42 億円、計 367 億円、これだけでも、今迄マグロ類(延縄)の水揚は日本一と誇っていた三崎港の水揚金額を上廻っている。

8. おわりに

日本の漁業の中において、カツオ・マグロ類の生産金額は約 3,100 億円で魚種別では第 1 位(全体の 16%)、生産量はタラ、サバ、イワシ類に続いて 70~80 万トン(1 割弱)で第 4 位を占め、カツオ・マグロ漁業は量的にも金額的にも重要な産業となっている。このようにカツオ・マグロ漁業が重要な産業であることを再認識するとともに、この重要な産業を永久に存続すべく、今後は、これらカツオ・マグロ類資源を保護、管理し、有効に利用して行く方向に進むべきである。

最後に、近年の三崎港における水揚量の減少に接し、現在、関係者も種々対策を考えているようだが、それ以上に、『さて、三崎はどうする』という問題提起をしたい。